

図書館員のおすすめ本⑧

すごろくで学ぶ安政の大地震

石川寛監修 平井敬編著 風媒社 2021 ¥1,500 (税別)

災害が起きると報告書が作成されるのは古今東西変わらないが、今から約170年前の安政東海・南海地震(安政元年11月4日・5日)の際には、一風変わった報告(かわら版)が作成された。その名は「諸国大地震大津波末代噺」。なんと「すごろく」の形態で、東は江戸、西は日向(宮崎)までの各地の被害を、すごろく一コマに1地域を充てて表現している。例えば、「宮 桑名 大あれ 大あれ」「阿波 讃岐 土佐 大やけ」「摂州三田 大地しん 大あれ」といったように、地名と被害状況を短文で、その様子を絵図で表している。ちなみにアガリは「大坂」。コマによっては一回止まりの意味だろうか「▲はそんりやう(破損料)」「▲とまり」等もある。

このすごろくかわら版を取り上げて、各コマを翻刻し、一コマ一コマ丁寧に各地の被害の様子等を解説したのが本書である。一コマ当たり見開き2ページで、詳細な被害の程度、現在の当地の様子などが写真・図入りで大変わかりやすく紹介されている。また関連情報も満載で、地震による液状化現象を記したコマ「美濃竹かはな(竹ヶ鼻)地さけ だろ吹出す」の解説では、同じく美濃(岐阜)で起きた濃尾地震での液状化現象を地図やスケッチなど織り交ぜて紹介している。

また、トピックやコラムも多数散りばめられており、どのページからでも楽しめる仕掛けとなっている。そのうえ、この珍奇なかわら版のおよそ原寸大の複製を付録にしているのが面白い。

本書を片手に、実際にすごろくで遊んで当時の被害の様子を学ぶもよし、今後発生するとされる「南海トラフ地震」への備えを学ぶにもよし、の良書。これからの防災を考えるために、ぜひ多くの方にご覧いただきたい一冊である。

なお、このかわら版原本は防災専門図書館の所蔵資料であり、右記QRコードから閲覧可能だ。



(矢野陽子: 防災専門図書館)

Live! 図書館員のおすすめ本 ダイジェスト

2023(令和5)年12月4日、日図協会館で図書紹介事業委員会主催のイベント「Live! 図書館員のおすすめ本 人はなぜ本を紹介するのか」を開催した。図書紹介事業委員会は、『図書館雑誌』の「図書館員のおすすめ本」コーナーで公共図書館等における選書等の参考に資する図書の紹介をしており、その活動の射程には、書評が書ける図書館員を増やすことも入れている。

第一部クロストーク「君はなぜその本を推すのか」では、大林正智委員、高橋将人委員の二人により、図書館員のおすすめ本ではどのような本を紹介するのか、おのおのの考えを話した。

第二部パネルトークでは、「われわれはなぜ本を紹介するのか」をテーマに、笹川美季委員の司会のもと、ゲストの田口幹人氏(合同会社未来読書研究所共同代表)、大矢靖之氏(文藝春秋営業推進部)、仲明彦氏(京都府立洛北高等学校図書館)の三氏が登壇した。同じ「本と人をつなげる仕事」でありながら、図書館と出版社・書店での立ち位置の違いを痛感する内容であった。トーク中「図書館は本を読む人が来るが、書店は本を読まない人も来る」という主旨の発言があり、会場ではそれに対する反応はなかったが、参加者のSNSからは、図書館員はそれとは逆の認識を持っていることが伝わってきた。先述の「立ち位置の違い」を象徴するような現象と感じられた。

このイベントは、図書紹介事業委員会初代委員長乙骨敏夫氏の「図書館だけでなく、出版・書店関係の方と書評について意見交換ができる場があれば」という思いが発端となっている。今回感じた図書館と書店・出版社の認識のずれの原因は何かを探り、図書館は何を目指しているのか、再度目的を確認し、図書館及び図書館員はSNSを駆使するなどして情報発信できるよう努めていきたい。

[NDC10:019.9 BSH:書評]